

令和5年5月1日発行 春燈/第78巻第5号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2023 May

5月号



成瀬櫻桃子の句

牡丹はや散りてあとかたなかりけり

『流寓抄以後』昭和二十八年

万太郎最晩年の「牡丹咲けるその一輪をいとしめる」牡丹いま活けをほりたる缺かな等五句を詠んだ一句。牡丹を句材に詠むのは安住敦「春燈」の連衆に多いが俳句作家なら初心の頃から一句は作っているだろう。桜、梅とともに歳時記に例句は多い。此の年五月六日誤嚥性窒息で急逝するまで我々に「俳句は家常生活に根ざした即興的な抒情詩である」の喩えを遺された。忘れまい……。

松橋利雄

成瀬櫻桃子の句

新参の身にあかあかと灯りけり

『草の丈』昭和二十七年

奉公にゆく者 来る者 仕事に馴染まぬうちは気後れして、当時はまだ普及していなかった電灯がやたらと眩しく、もじもじしている奉公人の姿が見える。

職人や芸人の町、浅草で生まれ育った万太郎には、奉公にゆく幼馴染の姿がいたたまれなく、詠まずにはいられなかったであろう。万太郎を「嘆かひの詩人」と言ったのは芥川龍之介。この思いは終生変わらなかった。

三上程子

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

友の訃を聴きぬる夕べ春寒し

(牧野さん逝く)

近隣の音なく暮るる追儼かな

爪を切りそろへる冬の終りかな

春の霜藁屋の影を持上ぐる

歌びとの誠を語る茂吉の忌

薄氷のつつかへてゐる如雨露かな

紅梅の開花誘ふ星座かな

雲梯のけふは閑なり春の雪

合格を告ぐる眼の澄み春夕べ

野を焼いて齡をひとつ加へけり



# 当月集

鈴木直充選



○ 大槻祐二

寒雀異国の戦知らぬげに

雪だるま赤きポストと並び立つ

一瞬の殺気飛び交ふ歌留多かな

饒舌の妻に相槌春炬燵

床を背に座る仲人うららけし

○ 立竹人

風はらみ日をふくむ山茱萸の花

ひとところ日をあつめたる蜺舟

蜺舟さざなみ雲をながしけり

蜺舟川風つよくなりにつけり

をりからの雨となりたり風信子

○ 阿部直己

春寒料峭村社に古き鳥居かな

山笑ふ疏水の水面輝けり

春風や小石を拾ふ開墾地（移住四年）

風光る見わたすかぎり牧草地

啓蟄や那須山麓の移住の地

○ 村上國枝

どの屋根も雪に覆はれ村眠る

豆齧り己が心の鬼やらふ

山眠る尾をもつものを懐に

今生の籠を外して日向ぼこ

凍蝶や祈りのさまに翅合はせ

○ 秋山 蔦

村なかの川ひと筋や冬景色

牡丹雪盛塩溶くる蕎麦処

春色やはすの萼の阿弥陀仏

極楽の東門桜隠しかな

此のさきは己の時よ春満月

# 春燈の句

鈴木直充選

朝市の列の膨れる桜東風

千葉 米川喜美代

己が死を天寿と言へり梅真白

薄水の小川今ならまだ跳べる

山焼や結の残れる村に住み

日脚伸ぶビル建て替への進む街

野を分かつ疎水の霞隠れかな

陽春の沖へ伸びゆく定置網

勝鬨のアーチ灯せり朧の夜

春一番洗濯物が踊りだす

舟を出す今うすらひに棹差して

山焼の火を取り囲む男たち

池之端春を吸ひ込む鯉の口

寒雀羽音固まり藪の中

鼓動打つ山ふところの雪解水

栃木 坂 由雄

東京 伊藤 洗楓

東京 神谷 正紀

水温み水面抜げる鯉の影  
柳鯉不意に閃光発しけり

我が誕生祝ふごと咲く福寿草

節分や隠るる鬼も退治せむ

健やかに独居楽しみ雛飾る

澄み渡る濃尾平野の春宇宙

たんぽぽや子らの声飛ぶ復興地

手に刺さる蛇口の水や冴返る

髪正し津浪潜りし女雛かな

両成敗したき戦や春寒し

こめかみに触れたる風や牡丹の芽

人の輪に離れて遠き春の虹

柔々と米炊きあがる春の宵

朧夜の数の合はない葉かな

東京 真如 和子

東京 大林 暁彦

岐阜 種田 利子

